

特捜証拠改ざん

評論家・立花隆氏

2010.10
京都



たちはな・たかし
40年長崎市生まれ。74年「田中角栄研究」を発表。ロッキード裁判の克明な傍聴記を残し、長年、特捜検察を観察。現在、東大、立教大の特任教授。

大阪地検特捜部の押収資料改ざん事件を前にして、法治国家日本の根幹が揺らいだと感じた。

法治国家がまず持つべき社会装置は、法執行（Law enforcement）機関である。法を守らぬ無法者を捕まえて強制的に法を守らせる機関、すなわち警察・検察の司法機関である。

しかし今回起きた事件が明らかにしたことは、そのような法執行機関が自ら法を破っていたという事実である。

ただ法と証拠だけを頼りに、悪を摘発していくはずの機関が証拠に手を加えて、悪人でも何でもないうる人を悪人に仕立て上げていた。これは文字通りの「フレームアップ（デッチ上げ）」である。それをやったのが日本の法執行の中核たるべき検察の腕コキの検事であり、そのような法律破り行為を認めていたのが、その上司の検事たちであったという事実は、日本という法治国家の基幹そのものが揺らいでいることを示している。

なぜこんなことが起きたのか。この事件の一番の背景として、検察の捜査が「初めにストーリーありき」になっていることを挙げる人もいるが、私はそうは思わない。初めに「ストーリーを作る」あ

法治国家の根幹揺らぐ

るいは「筋を読む」ことは捜査の基本中の基本で、そこを否定したらそもそも捜査は成り立たない。捜査だけではない。あらゆるサイエンスが、ストーリーを作ることから始まる。サイエンスは裸の事実観察をただ並べることではない。

そこに、あるストーリーを持ち込む、すなわち仮説を作ることがサイエンスの最初の一步である。サイエンスだけではない。人間の脳の基本的な認識機構そのものが、対象をあるコンテキスト（文脈）の下に置きストーリーを作るようにできている。

しかし、ストーリーの作りっぱなしでは、正しい認識は生まれない。次になすべきことは、ストーリーとリアルな現実を対比させて、検証することである。ストーリーと現実の間にズレが発見されたら、もちろん、ストーリーを修正する。

サイエンスは仮説とその絶えざる検証過程から成り立っている。人間の正しい認識はストーリーとリアルな現実を対置させる、絶えざる認識の修正作業の上に築かれる。それこそ人間進化を生んだ基盤そのものである。

しかし、前田検事がやったことが何かと言えば、自分の作ったス

トーリーと現実が合わないとき、ストーリーに合うように証拠を改ざんすることだった。

これは、科学者が自分の仮説に合うように実験データを改ざんしたに等しい。そのような科学者が科学コミュニティから追放されてきたように、前田検事もわれわれの社会から追放されなければならない。しかも前田検事はその結果として、罪なき人を罪に陥れることになるを知りつつ、あえてそうした。これは人間進化ではなく、人間退化の証明である。

それが前田検事の単独犯としてではなく、検察の組織ぐるみで行われたというなら、検察は組織ぐるみで責任を負わなければならない。

今の検察に救いがあるとすれば、真相追求が若手検察官の内部告発から始まったことだ。そしてこの事件の真相が検察内部の特命検察官たちによって暴かれたことだ。ロッキード検察以来の検察内部の真相追求精神と捜査能力はいまだに死んでいないと信じたい。